



Title	日原利国先生の思い出
Author(s)	岸田, 知子
Citation	中国研究集刊. 1985, 2, p. 59-60
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/61166
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

日原利国先生の思い出

岸 田 知 子

日原先生に初めてお会いしたのは、先生が阪大に集中講義に
来られた時だった。研究室のドアを開けて、「ああどうも、日
原です」とおっしゃった。今、この文章を書いていて、急にあ
の時のことが、昨日のことのように目に浮かんできた。も
う十五年も前のことになる。私は修士課程に上がったばかりだっ
た。先生が来られたらお茶でもお入れしてと頼まれて、お待ち
していたのだった。中哲の研究室まで案内をしてこられた教育
心理学の先生と、一瞬、同じお顔に見えたことを憶えている。
お二人は静岡高校の同期で、日原先生は研究室に来られる前に、
旧友のお部屋を尋ねたということだった。

翌年、先生は阪大に転任して来られた。森先生や研究室の人
たちとお引越しの手伝いに行ったことも今は懐かしい。そし
て始まった厳しい演習……わからなくて詰まった時の永遠に
続くかと思われた静けさ、「調べていません」とやむなく言う
と、「困りますね」とおっしゃっただけで黙っておられる、ど

うしていいかわからず、もう見捨てられたような気持ちになっ
たこと、どんな事情があったとして、それはそちらの事情、私
はこの授業のことだけをきみに要求しているのだと言う先生の
言葉に身を削られる思いをしたこと、一体何時に終わるのかと
暗くなった窓の外と時計を交互に眺めていたこと、毎時間終わ
るたびに次はもっときちんと調べて読んで来ようと決意して、
でもやはり充分にはできなかったこと……あのころの、日原
先生が与えてくださった日々を、再び持つことができるなら、
私は何でもするだろう。どんな代価を支払ってでももう一度あ
の日々を送りたい。もう一度、日原先生の授業に出たい。これ
は先生のもとで学んだすべての人の思いであることを、私は疑
わない。

生来、怠けものである上に、博士課程の二年目で出産した私
は、それを口実にしてはいけなないとわかってはいたが、結果的
には不勉強きわまりないありさまで、先生もずいぶんとあきれ

ておられたことと思う。にもかかわらず、助手の任に就く機会を与えてくださった。一年という短い期間ではあったが、この間に学び得たことは多かった。この年は懷徳堂文庫の目録を作る仕事の大詰めの年にあたり、索引作りに追われていた。集中講義に多くの先生をお迎えするようになったのもこのころだったかと思う。私にはすべてが初めてのことで、今思うと失敗ばかりしていた気がする。日原先生は決して、ああしろこうしろと具体的には言われなかった。「あなたに任すと安心だ、よろしく」と言われるだけで、途中で指示を仰いでもにこやかに笑うばかり、ただ、「よろしく」を繰り返された。ほっておかれたのではなく、背後にいつも先生の目があることがわかっていながら、緊張とひやひやどきどきの日々であったが、そうしていろいろなことを学べたのだと、後になって感じたのである。

助手になって大学を内側から見ると大事なことでと先生は言われたが、確かにとおっしゃるとおりであった。そしてつくづく先生の仕事の多様さと重要性、なによりお忙しいことに驚かされたのである。何ごとにも細心の配慮と慎重さで臨まれるから、気の休まることがなかったにちがいない。春と秋の懷徳堂講座にお世話役として日参される先生にお供して、時に後ろの席で居眠りをされる先生を見かけて、なぜかしらほっとしたことを憶えている。

先生のものごしの柔らかさに、初対面の人は強く印象づけられるらしく、他の研究室出身の人たちから、優しくて丁寧な先

生でいいねと何度も言われた。しかし、先生の贅辞で迎えられた新入りの学生は、先生がソフトで優しく腰の低い応対でいて、実は大変厳しい目で何事も見通しておられることに、まもなく気づく。一見、極めて打ち解けたふうではあるが、決して胸襟を開いてくださっていないようにいつも思えたものである。

先生に質問や相談をしても、先生から答えをいただくことはできなかった。結局、こちらがひとりで話して、ひとりで決めるほかなかった。でも、先生の前で決めたからと、そのあととは迷うことがなくなるのは不思議だった。自分のことは自分で考えていくしかないということ、先生は教えてくださったのである。その点においては、絶対に甘えを許されなかった。しかし、一方で学生それぞれについて、いつもあれこれと心配しておられた。しばらく、大学から遠ざかっていた私は、先生が絶えず氣にかけてくださることがわかって、どんなに心強かったことか。先生を失って、その思い出が胸をしめつける。これからは長く先生の指導を仰ぎ、あわよくば甘えもし、という私たちの願いを、早々に先生の方から断ち切ってしまった。せめて見守っていてほしいという望みすら、かなわなくなってしまう。先生は厳しすぎる。

砂糖をたっぷり入れたコーヒー、千枚漬、お芝居……先生を思い出すものは多い。昨秋、丸谷才一の忠臣蔵の本が話題になった。先生ならきつと一番にお読みになったろうと思った。